

非常時における大学生の行動に関する研究 —新型コロナウイルス感染症の蔓延下に着目して—

四家 武彦

世界的な新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行により、日本においても感染者や死亡者が増加している。また緊急事態宣言等の外出抑制により行動変容が促された。

本山貢（2003）は身体活動量の少ない大学生ほど気分悪化の傾向があるとする。加えて松下宗洋ら（2016）は余暇に加え移動にも抑うつ的な少なさに関連があるとした。以上は気分と身体活動に関する研究であるが、コロナ禍の先行研究として橋元良明（2020）のパネル調査がある。そこで橋元は、通学できないことが漠然とした不安を抱かせていることや、ネット上のやり取りが孤独感を軽減していること、外出自粛がかえって良い休息期間となっていることを示唆した。一方で示唆された苦楽の詳細や、これらに対する考え及び行動など、現状に大学生がどう向き合っているかは、この研究では十分に明らかとはなっていない。

本研究では感染症蔓延下という非常時における大学生の行動に着目し、その行動がとられた背景や要因を明らかにすることを目的とする。現状に対する大学生の考え方や行動内容などを詳しく探るため、調査手法として半構造化インタビューによる質的調査を用いた。調査対象者は日本国内の大学生13名で、調査期間は2020年7月から2020年12月である。

調査結果から、外出を抑制した生活について短所を挙げる一方、「苦には感じなかった」など、概ね適応し過ぎていたという声が少なくなかった。その中で多くの大学生はオンライン講義を軸とした生活を送っているが、特に講義・課題に取り組む時間の任意性と、作業場所の固定化については評価が分かれた。そしてこれは一人暮らしの大学生の生活リズムに関連があった。加えて調査協力者の全体を通し「移動がなくなったおかげで」など移動をコストと見る傾向が強いことが分かった。一方で「動かないとさすがにまずい」等の理由付けのうえで、これまでの習慣の有無とは無関係にほぼ全員が運動習慣を導入していた。

コロナ禍において大学生は講義のオンライン化による様々な利点欠点を受容している。これは時間割による“時間規定”や教室という“場”が取り払われたことによる影響がある。この影響の度合いは、一定のルールに従うのが苦か楽か、気分転換に場所の転換を求めるか否か、といった個人の趣向による面があると思われる。そしてこの趣向と現状とのギャップの大小が、大学生のコロナ禍における日常生活の満足度の大小に繋がっているのではないだろうか。また移動は最低限の身体活動量を確保する運動としての役割を担っていると考えられる。しかし語りでは移動と運動との評価にずれが生じ、そのずれを認知できない者もいた。このことから多くの者は移動に価値を見出す域に十分到達していないと思われる。したがって移動には運動という価値を常に伴うが、その価値の認識は潜在的なものに留まる。それが潜在的なものに留まった要因については、運動と移動との目的意識の違い、自粛をよしとする規範意識等複数の可能性があるが、これらの比較は基本的に今後の課題としたい。

（指導教員 後藤嘉宏）